立命館大学高等教育研究論文タイトル

－論文副タイトル－

立命　太郎（第一執筆者名・共同執筆者名・共同執筆者名）

＊執筆者名は採録決定まで記入せずにその分の余白を空けてください。

（文字色を白にしたり背景色を黒にしたりする方法は不可とします）。

原稿分量を正確に把握するため、本欄を含む注記は投稿時に削除してください。

このテンプレートは、立命館大学教育開発推進機発行「立命館高等教育研究紀要」の投稿論文（特集・事例研究・実践研究・報告）用です。原稿の執筆にあたっては、各号の原稿募集案内および投稿規程、執筆要領を十分ご確認のうえ、原稿をご作成ください。フォントは、日本語はMS明朝、英数字はTimes New Roman（半角）を使用します。文字サイズは10.5ポイントとします。投稿時は、執筆者名と所属機関名は記入せずにその分の余白を空けてください。

要　旨

要旨は、400字以内で記載してください。

とする。この論文では、日本の大学評価制度改革の概要を紹介するとともに、大学の自己点検・評価をふまえた日本の大学にふさわしい大学評価の仕組みを構築するために、その改革課題を整理することを試みる。

キーワード

○○○○、○○○○、

# １ はじめに（見出しは、ゴシック体、10.5ポイント）

本文のフォントは、日本語はMS明朝、英数字はTimes New Roman（半角）を使用します。文字サイズは10.5ポイントとします。図（写真）及び表には通し番号を付し、表の表題は表の上部に、図（写真）の表題は図（写真）の下部に記し、頁の行内に貼り付けてください。なお、図（写真）及び表が一つの場合にも、図1または表1と記します。図（写真）及び表の出所は必ず明示してください。孫引きの場合は「原資料」と「出所」の双方を明記する。注記は本文の最後に一括し、本文中の該当箇所の右肩に1）、2）のように示します。文中では投稿者や連名者が特定される情報や表現は避けてください。ただし本文の説明や図（写真）及び表の提示の都合上、これらの情報を記述する必要がある場合は表現を工夫してください。

本文中で文献を示す場合は、以下の通りとします。

例：「大学職員が教員と協働して活躍することがいっそう要請されるようになってきている」（江原 2015:114）ことが指摘されている。  
 …が明らかにされている（江原 1994:165）。  
 …が明らかにされている（沖 2013，鳥居ほか 2013）。  
 江原（2005）によれば、……  
 …が明らかにされている（Saupe 1990，Trow & Clark 1994）。  
 …が明らかにされている（Kuh et al. 2009）。  
 …と論じている（Boyer 1990＝1991:51-64）。

例文：

大学評価とは、大学等の高等教育で行われるさまざまな活動の実態を、関連した情報や資料をできるかぎり科学的な手続きで収集・分析して明らかにするとともに、それらの活動の意義や価値、問題点などを判断したり評価して、その成果を実践的に活用することを意味する言葉である（江原 1984:15、江原 1998:7）。日本語の「大学評価」に近い意味をもつ英語は「アカデミック・エバリュエーション」だが、「ユニバーシティ・エバリュエーション」も使われることがある（Dill 2003:29-30）。

表1　表タイトル

表

出所：○○○

図

図1　図タイトル　出所：○○○

# ２ 評価主体別にみる大学評価の動向と問題点

2.1 強化される行政主導の大学評価

## 注

*1) 注記は本文の最後に一括し、本文中の該当箇所の右肩に1）、2）のように示してください。各注について全角1字ぶら下げ（先頭行は字下げせず、2行目以降を全角1字下げ）とします。*

1) 「学びの実態調査」は、立命館大学教育開発推進機構の教学IR（Institutional Research）プロジェクトが実施する全学規模の学修行動調査（Student Survey）で、新入生調査（1回生に実施）、在学生調査（2、3回生に実施）、卒業時調査、あるいは他部局と協同で開発中のものを含めると「卒業生・修了生アンケート」や「大学院生調査」などがある。ほとんどの学部で学生にIDを記入させることにより、入試形態、学業成績やGPA、就職データなどとリンクさせることが可能で、立命館大学において学生が身につけた知識・技能・態度を正課内外から分析し、その結果を学部の教学改革に反映させている。

2) アメリカの適格認定協会をはじめ、各国の大学評価制度の概要については、米澤他、2000年、174-178頁；吉川、2004年、50-51頁；馬越、2004年、9-10頁；日永、2000年、158-160頁；早田、2003年、124頁などを参照。

3) 認証評価機関による大学評価の問題点や課題については、早田、2003年、124頁；合田、2004年、8-9頁；舘、2005年、8-9頁、14-15頁、16-17頁；工藤、2005年、83頁；リクルート　カレッジマネジメント編集部、2008年、5-7頁などを参照。

## 参考文献

文献は，注の後にまとめて記載する。日本語・外国語を含めて著者の姓のアルファベット順，年代の古い順に西暦で記し、同一著者の同一年の文献は、引用順に a, b, c ……を付す。文献は注記の後ろに一括し、記載は次のとおりとする。

(1) 日本語の場合

　a.図書

　　著者名『図書名』出版社、刊行年。

例：江原武一『大学のアメリカ・モデル―アメリカの経験と日本』玉川大学出版部、1994年。

ケルズ, H.R, 喜多村和之・舘昭・坂本辰朗訳『大学評価の理論と実際－自己点検・評価ハンドブック』東信堂、1998年。

　b.論文（図書掲載）

　　著者名「論文名」編著者名『図書名』出版社、刊行年、xx-yy頁。

　例：江原武一「大学の管理運営改革の世界的動向」江原武一・杉本均編著『大学の管理運営改革―日本の行方と諸外国の動向―』東信堂、2005年、3-45頁。

　c.論文（雑誌掲載）

　　著者名「論文名」『雑誌名』巻数・号数、刊行年、xx-yy頁。

例：江原武一「高等教育におけるグローバル化と市場化―アメリカを中心として」『比較教育学研究』第 32号、2006年、111-124頁。

(2) 外国語の場合

　a.図書

　　著者名, *図書名*, 出版地（出版都市名,州名,国名等）, 出版社, 刊行年.

例：Saupe, J. L. *The Functions of Institutional Research, 2nd edition.* Tallahassee, FL: Association for Institutional Research, 1990.

b.論文（図書掲載）

　　著者名, “論文名”, In　編著者名（ed.）, *図書名*, 出版地, 出版社, 刊行年, pp.xx-yy.

・編著者名が複数人いる時は（eds.）

例：Dill, D.D. “The Regulation of Academic Quality: An Assessment of University Evaluation Systems with Emphasis on the United States.” In National Institute for Educational Policy Research of Japan (ed.). *University Evaluation for the Future: International Trends in Higher Education Reform*. Tokyo: National Institute for Educational Policy Research of Japan, 2003, pp.27–37.

　c.論文（雑誌掲載）

　　著者名, “論文名”, *雑誌名*, 巻数・号数, 刊行年, pp.xx-yy.

例：Rice, R.E. “Enhancing the Quality of Teaching and Learning: The U.S. Experience.” *New Directions for Higher Education*, No.133, 2006, pp.13–22.

(3) ウェブサイトの場合

電子出版のみの文献・資料やウェブサイトから引用した雑誌・新聞等の記事等については、下記の引用文献の提示方法にしたがい、URL と最終アクセス日を（ ）内に記載する。

　例：厚生労働省「人口動態職業・産業別統計」（https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/135-1.html, 2019.6.3）

　例：College of William and Mary “St Andrews William & Mary Joint Degree Programme”. (https://www.wm.edu/as/undergraduate/more-pathways/standrews/index.php, 2018.8.13)

（4）会議資料、提案文書、職務著作物等の内部資料の場合

外部から参照不可能なもの（大学の内部リンク）で、公表の許可を得た会議資料、提案文書、職務著作物等の内部資料を引用、参考にする場合は、本文に「注番号」を付し、論文等の最後に「「資料名」（会議名、開催年月日）」を記載するか、もしくは複数の資料を引用、参考にした場合には、論文等の最後にまとめて「本稿の執筆に当たり、「会議名」の資料等を引用（参考）にした。用いた資料は次の通りである。「資料名」（会議名、開催年月日）、…。」のように記載する。

なお、外部に公開されていない内部資料のうち執筆者の署名付きのレポート等については、論文等の最後に「謝辞」として「本稿の執筆に当たり、著者名「資料名」発行先もしくは会議名、発行年<月日>を参考にし、多くの引用を行った。」を記載する。

記載例：

江原武一『大学のアメリカ・モデル―アメリカの経験と日本』玉川大学出版部、1994年。

江原武一「アメリカにおける大学評価」慶伊富長編『大学評価の研究』東京大学出版会、1984年、15-29頁。

沖裕貴・井上史子・林泰子「日本の大学におけるルーブリック評価導入の方策と課題－客観的，厳格かつ公正な成績評価を目指して－」日本教育情報学会第28回年会『年会論文集』、2012年、166-169頁。

江原武一「高等教育におけるグローバル化と市場化―アメリカを中心として」『比較教育学研究』第32号、2006年、111-124頁。

Wiggins, G. *“Educational Assessment: Designing Assessments to Inform and Improve Students Performance”,* Jossey-Bass A Wiley Imprint, 1998.

Rice, R.E. “Enhancing the Quality of Teaching and Learning: The U.S. Experience.” *New Directions for Higher Education*, No.133, 2006, pp.13–22.

How to Introduce Rubrics into Japanese Universities:

Aiming at Fairness, Objectivity and Rigor in Assessment of Performance

RITSUMEI Taro

(Professor, Institute for Teaching and Learning, Ritsumeikan University)

Abstract

Central Education Council Report published in August, 2012 showed an urgent issue as to clarifying competence developed in undergraduate programs and introducing fair, objective and rigorous assessment of performance, in order to promote and strengthen the conversion movement in quality assurance of Japanese universities.

Key words

○○○○，○○○○